博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　佐野洋　　印

学位申請者
伊藤玲子（いとう　れいこ）

論　文　名
「ブルゴーニュ地方の方言テキスト L'âme du Morvan の地理的同定－地理言語学的分析と量的分析に基づくアプローチー」

【審査結果】

2026 年 2 月 19 日（木）、佐野洋（主査）、秋廣尚恵(主任指導)、佐野洋、内原洋人、川口裕司（本学名誉教授）、黒澤直俊（本学名誉教授）からなる審査委員会は、伊藤玲子　（いとう　れいこ）氏より提出された博士学位請求論文「ブルゴーニュ地方の方言テキスト L'âme du Morvan の地理的同定－地理言語学的分析と量的分析に基づくアプローチー」の審査および口述による最終試験（公開審査）を実施し、全員一致で博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

【本論文の概要】

本論文は、言語学の中でも特に地理的な視点から言語の変化や分布を探る言語地理学（方言地理学）の研究である。Morvan 地域（フランス・ブルゴーニュ地方）の言語地図を使って、過去の Morvan 地域の物語（L'âme du Morvan : 1923 年初版の 39 の物語）が書かれた話し言葉の地理的同定を高精度で探るもので謎解きのような興味深い論考である。著者は、外的環境（行政区の変遷など）や地理的条件（近隣する地域や高地であることなど）に注目し，綴り字からの音価推定に際して，地理言語学的分析を行い、それと合わせて語彙・形態の量的分析を統合する分析を行った。その結果、Morvan の方言テキスト L'âme du Morvan から抜粋した 39 話は、特定の地域（Saulieu 付近と Morvan 北東部・中央部）の話し言葉で書かれたと結論づけている。

具体的な分析方法は、方言テキストの綴りと言語地図をつきあわせ音価推定を行うが、推定しようとする音価を、(1) 歴史的音声変化を手掛かりとした音声の地理言語学的分析と (2) 統計学的手法による語彙・形態の量的分析を通じた類似度によって決定する。

複合分析を採る本研究の試みとして、言語地図上の情報の解釈を、単一地点のものとせ

ず、分布傾向として面で捉えたこと、言語性質の多面的な解釈をした（音声および語彙・形態といった複数の観点による分析を融合した）こと、量的アプローチを採用したことで再現性を担保し，比較分析の枠組みを提案したことが挙げられる。

非音声的資料から、音価推定と言語地図を参照して発音記号と対応させることによる、代替アプローチにより、音声を再現させることを試み、(1) Morvan 地域の過去の言語音を明らかにしたこと，(2) 推定された音が言語地図にどのように分布しているかを示したことが評価できる。歴史的・文献的資料と言語地図の背後にある構造的なつながりを明らかにした。また消滅した可能性が大きい Morvan 方言を再生する可能性も秘めており言語地理学的な学術成果としても評価できる。

質的アプローチと量的分析の複合分析に拠って方言テキストの地理的同定を行う点にポイントがあるが、これは綴り字からの音価推定に客観性を与え、本研究で示されたリサーチクエスチョンへの回答が妥当な論拠を持つことを意味している。学術分野への寄与として、方言地理学の点では、行政区分によっては地理的多様性が説明できない事例研究になったこと、言語学観点からは、綴りの揺れが音韻対立の有無を表している可能性に触れているなど音韻分析ついての展望が示されたことである。

評価の点は以下である。フランスでもあまり類例のない研究であり、研究結果（歴史的音声変化が一様に進まなかったことの具体的なケースとして興味深い事例）の点でも、研究手法（音声の地理言語学的分析と統計学的手法による語彙・形態の量的分析の併用）の点でも貴重な成果である。地理言語学の観点からは、綴り字から音価推定を試み、失われた言葉の復元に取り組んだことや、地理言語学的な多様性について、行政区分や教育施策など多角的な視点から論考している点が挙がる。

本研究の分析手法の特徴に関わるが、音声や語彙面での方言研究は多いが、比較的記述の少ない形態統語論にも踏み込めた点は興味深く、分析においても、相当な作業を要する現地における事前調査に加え、綴り字からの音価推定過程は、緻密で実証的に一つ一つ丁寧に仕上げている。論考では、音価の推定過程を含め調査手順が明快に説明されているほか、分析の結果についても、豊富な図表と詳細な結果が別冊で示され、本文との対応も緻密に且つ丁寧になされている。こうした点は、論文読者の研究理解を助けてくれているとともに、調査の再現性と透明性を示すものである。

本研究の成果は、Morvan 地域で歴史的音声変化がどのように進んだのか、同時に多様性が如何に形成されたのかを明らかにした。その結果、物語の書かれている話し言葉の地理的同定が出来た。しかしながら Morvan 地域の音韻体系の点からは断片的な記述に留まっていて、すべての最小対立（ミニマルペア）が得られてはいない。但し、このことは方法論の不備でなく資料に含まれる語彙数に

よる限界であったと思われる。

今後の課題として、言語類型論に拠る理論的な考察を期待する。例えば、本研究対象となったテクストから浮かび上がる音素体系や言語変化は通言語的に見慣れたものか、或いは特異な特徴を持つのかを考察することで方言同定により信頼性を付与する可能性がある。

本論文は 3 部構成である。第 1 部の論考（145 頁）は 9 章から構成される。第 2 部は、地理言語学で重要な言語と地図の相関解釈のための図表（127 頁）である。第 3 部は、綴り字から音価推定に用いられた 294 語一覧（各語彙の分類名、推定された分節音表記、並びに言語地図上の位置との対応）がまとめられている（234 頁）。

以下、第 1 部の論考の各章の概要を示す。

第 1 章は，Morvan 方言の諸特徴の概要説明からはじまり、研究動機、研究目的、研究設問が明示され、分析方法と参照する資料（方言テキスト L'âme du Morvan）が提示される。Morvan 方言は、ブルゴーニュ地方の中央にある Morvan 地域で話される方言のことである。オイル語圏に属しており、ブルゴーニュ方言とニヴェルネ方言の影響を受けると同時に、フランコ・プロヴァンサル方言とも多くの共通点を有する。1923 年初版の方言テキストである L'âme du Morvan に収録された 39 話の物語を見ると、同じ話の中でも綴り字が揺れている。したがって、伊藤氏は、このテキストが、複数の地域の異なる話し言葉で書かれたのではないかという仮説を立てた。そして、この方言テキストの話し言葉を地理的に同定することを研究目的として設定している。分析方法は、方言テキストの綴りと言語地図をつきあわせ音価推定を行う。音価推定では、歴史的音声変化を手掛かりとした音声の地理言語学的分析と統計学的手法による語彙・形態の量的分析を併用する。最終的に 2 つの分析を統合することで方言テキストの地理的同定を行う。

第 2 章は，Morvan 方言の言語学的特徴、および、方言テキストの綴り字分析についての先行研究を整理し、先行研究において不足している点を指摘した。まず、Morvan 方言の先行研究として、Taverdet (1973a)、Régnier(1979a)、Bertrant(1979) を概観している。これらの先行研究では、言語的多様性について、地理的特徴や歴史的行政区分の変遷の観点からの分析が不足していることを指摘している。ついで、方言テキストの綴り字分析に関する先行研究として、Taverdet(1981)と Jejcic (2006a, 2012)を引用した。とりわけ、Jelcic の研究から、方言テキストの中には、方言表記とフランス語表記の双方が使用されていること、綴り字を方言地図の発音記号と照らし合わせることで、消滅した方言を方言テキストからある程度再構築することができることが示されている。これら先行研究の知見は、伊藤氏の博士論文の方法論の土台を支えるものとなるが、綴り字の揺れと地理的分布との関係、綴り字と言語地図の連携手法、地理的特徴、歴史的行政区分の観点からの分析が未解決であると批判している。伊藤氏は、Morvan 方言の言語的多様性を理解するには、この地域全体

の地理的構造、歴史的行政区分の変遷と言語境界の理解が不可欠であると述べている。

第 3 章では，Morvan の地理的構造、歴史的行政区分の変遷を概観し、ALB や ALF などの言語地図使用を参照しつつ、Morvan 方言の言語境界と連続性を明らかにした。そして、パイロット的調査の実施によって、Morvan 方言の音声と形態の地理言語学的特徴を概観し、この調査により、Morvan 方言は、西方面から東進する標準形とブルゴーニュ方言が接触する地域であることを明らかにしている。また、Morvan では、全体として、方言形が分布する場合と、南部の標準形とそれ以外の方言形が対立する場合と、全体が標準化する場合が観察されることを指摘し、Morvan の言語的多様性は必ずしも行政区分と一致するわけではなく、標高や道路網などの影響を受けていると伊藤氏は主張する。

次に，第 4 章において，研究対象である資料、L'âme du Morvan （1973 年初版）の内容と言語的性質を明らかにし、その中からコーパスとして抽出する 39 話と分析対象語 294 語の選定基準、言語地図 ALB の地理的範囲について述べる。39 話は著者とされる（が、実際はよく分からない）Guillaume の作品と他の著者による作品の転載によって構成されている。綴り字の揺れには、母音字の揺れ、子音字の揺れ、子音クラスターの第 2 要素 L の揺れ、「 - 」の有無、複合的要因による揺れに分類される。また同音異義語の使用も見られる。方言表記には規範がなく、異なる書き手によって物語が書かれた場合には綴り字が揺れるし、同じ書き手に書かれた物語内でも綴り字が揺れる場合がある。これら諸条件を確認しつつ、意味と語源が明らかであり、かつ言語地図 ALB の見出し語になっている 294 語を分析対象語として選別した。

第 5 章は、本研究の分析手法について手続き論的に説明するもので、音価推定と地理的同定の方法について述べ、第 6 章で行う音声分析の方法、第 7 章で行う語彙と形態の一致率による量的分析の方法について述べている。

第 6 章では、地理言語学的観点による音声分析を行った。コーパス（ L'âme du Morvan の 39 の物語からなるテキスト）の母音と子音については、地域フランス語としての方言形とフランス語標準形が見られた。方言形はヨンヌ県南東部、コート＝ドール県、ソーヌ＝エ＝ロワール県と連続している。これらは旧ブルゴーニュ州に大部分一致するが、必ずしも行政区分だけでは説明できないものもあることを示し、かつて広い地域に分布していた古い音声形や語形はブルゴーニュ地方では消滅していたが、Morvan に取り残され、言語島を形成していることが分かった。語末子音 *-r* については、17 世紀以前にさかのぼる脱落した綴りと 17 世紀以降に再建された綴り字が観察された。綴り字が標準形の語が言語地図の Saulieu 付近に分布している場合があるが、これは物語の書き手が、方言とフランス語のバイリンガルであったことと、その書き手が、読者が物語を理解することを促すため敢えて標準形を使用したこと、さらには 19 世紀末に義務教育が始まったことで、標準化が一層進んだことなどが影響していると考えられる。

7 章では、語彙・形態の一致率による量的分析が行われている。(1) 選別された 294 語、(2) カテゴリー別に分類した語（宗教、農業、酪農、農村生活に関わる語）、(3) 主語人称代名詞と動詞の形態について、それぞれ、39 話と Morvan の ALB18 地点との一致率を算出し、地点との一致を数量的に明らかにした。その結果、(1) については 39 話全体で地点 30, 27, 65, 80 で高一致となり、(2) では、「宗教」では特定の地域との関係は確認されなかったが、農業、酪農、農村生活については、圧倒的に地点 30 で高一致であった。このことは、（L'âme du Morvan の著者であるとされる）Guillaume が獣医であったため、その活動範囲であったことが影響していると考えられる。(3) はおおむね、旧ブルゴーニュ州と一致していた。

第 8 章では、第 6 章と第 7 章から得られた結果を統合することで、39 話がいずれの地点の話し言葉と最も近いかを総合的に検討している。その結果、推定音価群が高一致で観察されたのは、言語地図の地点 30 であった。この地域特定に基づき、著者とされる Guillaume の故郷、Saulieu 付近および、Morvan 北東部・中央部のバ＝モルヴァンの話し言葉であると同定することができたのである。当初の仮説である「（複数の書き手を前提とする）複数の地域の異なる話し言葉で書かれた」ことが、歴史的音声変化を手掛かりとした音声の地理言語学的分析と統計学的手法による語彙・形態の量的分析を併用する統合分析の結果から否定されたのである。

第 9 章では研究の成果がまとめられる。方言テキストである L'âme du Morvan の地域特性が明らかになった。39 話が複数の話し言葉によって書かれたという当初の仮説は否定された。コーパスの話し言葉はおおむね、旧ブルゴーニュ州の範囲にあるが、行政区分だけではなく、距離、地形、交通網、著者の個人的な社会活動などの影響を重層的に受けている。

本研究の意義は、音声の地理言語学的分析と語彙・形態の量的分析を統合することで、方言テキストの話し言葉の地理的同定を行う方法論を提案したことである。綴り字による音価推定という、非音声資料を用いた代替的方法によって、歴史的文献的資料と言語地図を組み合わせて分析・研究することの可能性と有効性を示した貴重な論考である。

【審査の概要】

本論文に関する公開審査は、2026 年 2 月 19 日（木）、午後 1 時 25 分から午後 2 時 50 分にわたり本学・留学生日本語教育センター棟 308 室に於いて実施された。審査では、はじめに著者から本論文の概要と成果についての説明がなされ、その後に各審査委員との間で質疑応答が行われた。

まず、これまでの先行研究でもフランス語化や、歴史的音声変化が複雑な変異を構成している点については、類似した見解は出されていたが、著者自身がどの方言を用いて書いているかという点では検証されていると思うが、実証的研究以外に何か今回の調査で新規

に分かったことはあるか、当時（20 世紀半ば）の資料分析に対し、参照資料として年代的に当時に近い頃の出版された辞書や音声記述を用いなかったのはなぜか、・音声的補助資料による検証が必要ということが指摘されているが、現実にそのような資料は存在するのか（入手可能なのか）などの答えを求めた。

これらに対し伊藤氏は、綴り字から音価推定する問題構造に量的手続きを適用したことの新規性を挙げたほか、音声資料の存在は（YouTube で）確認しているが音声内容（誰が何を話したのか）が不明であり、分析に適さないことが説明された。

さらに、個人的活動の影響が強いと思われるが、Guillaume の個人的方言と地理的方言は一致するのかどうか、Morvan 方言の音素目録音素目録や韻律体系など、分節音の音声レベル以上について考察することでも方言同定が可能なのではないかとの質問がなされた。伊藤氏からは、著者推定の結果は（著者の質的調査を踏まえ）概ね妥当であること、音素目録は作成していないことの返答があった。

また、審査委員からの指摘点として、言語の標準化の主要因が教育の義務化であると説明しているが、例えば、人口増加や地域への人口集中によっても標準化が起こる。結論として得ている地域（Saulieu 付近）は、交通の要所であることから人口動態に寄与する地形などがむしろ大きな要因だろう、音価推定に際し、分節音レベルのみならず、音節構造や音素配列論、強勢などについても調べてみるとよかったことを伝えた。

これらコメントに対しても伊藤氏は指摘された点を把握し、音韻の体系化を今後の課題として述べ、また音節構造をはじめとした韻律体系の解明にも取り組みたいことなど、真摯な返答で今後の研究の発展の期待が持てる応答であった。

以上、論文審査および最終試験の結果から、審査委員会は全員一致で、提出された論文が本学の博士論文としての水準を十分に満たすものであると評価し、伊藤玲子氏に本学博士（学術）の学位を授与することが適切であるとの結論に至った。

―以上―